

## 用言の名詞化に関する一考察

(日韓両国語の対照研究)

崔 昇浩

## 1. 用言の名詞化の形式

日韓両語の用言の名詞化に表れる形式として、日本語では動詞の語幹に「i・e」がついた形(つまり連用形<sup>1)</sup>)が名詞として用いられ、そして形容詞<sup>2)</sup>は語幹に接辞「sa(さ)・mi(み)」をつけて名詞化する。このように日本語では動詞と形容詞との名詞化の形式が異なっている。しかし韓国語では動詞も形容詞も共に語幹に接辞「i(이)・(ũ)m(음)・ki(기)」をつけて名詞化する。

- (1)a 彼は縄跳び(nawatob-i)がうまい。  
 b 그이는 줄넘기(chulnŏm-ki)를 잘 한다。  
 (2)a 本棚の作り付け(tukurituk-e)がきれいだ。  
 b 책장 붙박이(putppak-i)가 예쁘다。  
 (3)a 彼は嬉しさ(uresi-sa)を隠しきれなかった。  
 b 그이는 기쁨(kippũ-(ũ)m)을 감추지 못 해 했다。  
 (4)a 痛み(ita-mi)を覚える。  
 b 아픔(apũ-m)을 느끼다。

これを表でまとめると次のとおりである。

	日本語	韓国語
動詞	i・e(連用形)	i(이)・(ũ)m(음)・ki(기)
形容詞	sa(さ)・mi(み)	

(i・eは動詞の種類異形態である)

注1) 連用形: 動詞が用言に続く形を指す。以下連用形と呼ぶことにする。  
 この呼び方が正しいかどうかには諸説があるが、ここでは通説にしたがうこととする。

2) 形容詞: 日本語には形容詞と形容動詞の二種類がある。ここでは特に断らない限り、形容詞と形容動詞両方を指す。

日韓両語の用言の名詞化は、日本語の名詞化形式に韓国語の接辞中の一形式だけが対応するのではなく、韓国語の接辞「i (이)・(ü)m (음)・ki (기)」三形式が対応したり、または接辞二形式が対応したりする。そして韓国語の接辞に日本語の名詞化形式だけではなく、名詞が対応したり、後述の構文的名詞化形式が対応したりもする。また逆に日本語の名詞化形式に韓国語の接辞形式だけでなく、名詞が対応したり、補文化形式が対応したりもする。

- (5) a 長年の望みがかなった。  
 b 오랜 소망을 이루었다。
- (6) a 望みを一身に浴びる。  
 b 희망을 혼자서 받다。
- (7) a まだ望みはある。  
 b 아직 바람은 있다。
- (8) a 餌が足りない。  
 b 먹이가 부족하다。
- (9) a 食べることはやさしくない。  
 b 먹기는 쉽지 않다。
- (10) a 朝食は体に悪い。  
 b 빨리 먹음은 몸에 해롭다。

## 2. 日韓両語の動詞の名詞化表現の意味・用法

### 2.1 動詞の語彙的名詞化と構文的名詞化

前述のように、韓国語動詞の名詞化表現は動詞の語幹に接辞「이・음・기」をつけて名詞化する。日本語動詞の名詞化表現は動詞の連用形形式を用いて名詞化する。

次(11)～(13)は韓国語の動詞「놀다」に接辞「이・음・기」がついた形が名詞として使われている。日本語はいずれも連用形形式「遊び」が名詞として用いら

れている。そして両語の名詞化された形はそれぞれの文で、名詞の機能の一つである、目的語として用いられている。このように名詞化された形式がただ名詞として使われる場合を語彙的名詞化とする。

- (11) a 놀이를 즐긴다.  
       b 遊びを楽しむ。  
 (12) a 놀음을 즐긴다.  
       b 遊びを楽しむ。  
 (13) a 놀기를 즐긴다.  
       b 遊びを楽しむ。

(11)の「놀이」は具体的な「遊び」、例えば、カルタ遊び、花見、紅葉狩りのような具体的なイメージを浮かべられる遊びである。(12)の「놀음」は「賭博」の意の「遊び」である。また(13)の「놀이」は「遊ぶ」動作を抽象的に概念化した行為である。

次の文はいずれも「彼がお金を稼ぐ」という補文を持っている。しかし韓国語の名詞化された形式には語彙的名詞化と同様に、動詞の語幹に接辞「음・기」が用いられ、また動詞に形式名詞が続いた形が用いられている。これに対応する日本語の名詞化表現はいずれも連体形に形式名詞がついた形式が用いられている。このように名詞化された形式が補文を含んでいる名詞化を構文的名詞化とする。

- (14) a 그가 돈을 번 것은 곧 밝혀졌다.  
       b 彼がお金を稼いだことはすぐ明らかになった。  
 (15) a 그가 돈을 벌었음은 곧 밝혀졌다.  
       b 彼がお金を稼いだことはすぐ明らかになった。  
 (16) a 그가 돈을 벌기는 어렵다.  
       b 彼がお金を稼ぐことは難しい。

韓国語動詞の構文的名詞化の形式は接辞「음・기」がついた二形式と日本語と同様に動詞に形式名詞がついた形式とで三つの形式があるのに対して、日本語の構文的名詞化形式は連体形に形式名詞がついた形式が用いられる。

語彙的名詞化と構文的名詞化は区別されなければならない。というのは、単に前者はその機能や変化が語彙範疇の中でなされ、純然たる名詞として用いられるのに対して、後者は構文上補文全体を構文的に名詞化しただけで用言の機能は全く失われていないからである。

### 2.1.1 日本語動詞の語彙的名詞化

日本語の動詞の語彙的名詞化の形式は連用形名詞一つだけである。これは副詞には修飾されないが、形容詞には修飾される。そして時制や相を持つことができない。こういう機能は普通の名詞の機能と全く同じである。つまり、日本語の連用形名詞表現は完全に名詞化して、名詞としての機能を全うすることができる。

- (17)\* 思いきり遊びだけをする。
- (18) 危ない遊びをするな。
- (19)\* 遊びたことは忘れる。
- (20)\* あそびていることは良くない。
- (21) 私の遊びは立派なものだ。
- (22) 遊びが面白い。
- (23) 遊びを楽しんではいけない。

### 2.1.2 韓国語の動詞の語彙的名詞化

韓国語の動詞の語彙的名詞の形式には三通りが可能である。これは用言の語幹に接辞「이・음・기」がついた形がある。これらの接辞「이・음・기」がついた形は、前の構文的名詞化のところで述べたように、いつも名詞的に使われているわけではない。

まず韓国語の動詞の語幹について名詞化する接辞「이・음・기」三形式の語彙

的名詞化について、まず動詞語幹に接辞「이」がついている形から見てみよう。

- (24)\* 잘 **벌이**가 있다 (良く稼ぎがある)
- (25) 좋은 **벌이**가 있다 (いい稼ぎがある)
- (26)\* **벌었**이가 있다 (稼ぎたがある)
- (27)\* **벌고**있이가 있다 (稼ぎているがある)
- (28)\* **벌겠**이가 있다 (稼ぎ意志がある)
- (29) 나의 **벌이**는 시원찮다 (私の稼ぎはよくない)
- (30) **벌이**가 좋다 (稼ぎがいい)
- (31) **벌이**를 잘한다 (稼ぎがうまい)

ここで使われた接辞「이」は語彙的名詞化で、完全な名詞であることが分かる。まず、副詞の修飾(24)は受けられなく、そして時制(26)や相(27)、そしてムード(28)を持っていない。二番目に形容詞の修飾(25)は受けられているし、名詞の連体修飾(29)も受けている。三番目に名詞の機能である、主語(30)と目的語(31)として使われている。

第二に動詞語幹に接辞「음」がついている形をみよう。

- (32) 심하게 **꾸짚**음을 당했다 (ひどく叱りを受けた)
- (33) 심한 **꾸짚**음에 어이없어 하다 (ひどい叱りにびっくりした)
- (34) 대단히 **꾸짚**었음에도 불구하고 말을 안 듣는다 (ひどく叱ったのにも関わらず言うことを聞かない)
- (35) **꾸짚**고 있음에도 만전을 부린다 (叱っているにも空を使っている)
- (36) 언젠가는 한번 **꾸짚**겠음이라고 말했다 (いつかは一度叱ると言った)
- (37) 친구의 **꾸짚**음을 듣고 깜짝 놀랐다 (友人の叱りを聞いてびっくりした)
- (38) **꾸짚**음이 대단하다 (叱りが甚だしい)
- (39) **꾸짚**음을 무서워하다 (怒りを恐れる)

ここで使われた接辞「음」は語彙的名詞化も構文的名詞化も可能である。まず、用言性を持っているかどうか判断できる、副詞の修飾(32)も受けており、そして時制(34)と相(35)とムード(36)とも結びつくことができる。二番目に名詞性を持っているかどうか判断できる形容詞(33)の修飾も受けているし、名詞の連体修

飾(37)も受けている。三番目に名詞の働きである、主語(38)と目的語(39)として用いられている。

この接辞「음」は完全な名詞化接辞「이」と違って、名詞性と用言性を同時に持っている接辞である。

第三に動詞語幹につく接辞「기」についている形をみてみよう。

- (40) 친구와 깊게 **사귀기**는 쉽지 않다 (友人と深く付き合うのは難しい)  
 (41) \*친구와 깊은 **사귀기**는 쉽지 않다 (友人と深い付き合うのは難しい)  
 (42) 그와 **사귀었기**에 잘 되었다. (彼と付き合ったのが良かった)  
 (43) 그가 **사귀고 있기**에 아무말도 안 한다.  
 (彼と付き合っているので何も言わない)  
 (44) \***사귀겠기**라고 말했다 (付き合う意志だと言った)  
 (45) \*나의 **사귀기**에는 어렵다 (私の付き合うには難しい)  
 (46) **사귀기**가 힘들다 (付き合いが難しい)  
 (47) 친구와 **사귀기**를 좋아한다 (友人と付き合うことが好きだ)

ここで使われた接辞「기」は語彙的名詞化よりも構文的名詞化のほうが強いことが分かる。まず、用言性の判断である副詞の修飾(40)は受けられ、そして時制(42)と相(43)とも結びつく。ただムード(44)とは結びつかない。二番目に名詞性の判断である、形容詞の修飾(41)が受けられず、名詞の連体修飾(45)も受けられない。三番目に名詞の機能である主語(46)と目的語(47)としては使われている。

以上のように韓国語の接辞の中で名詞性の最も強いのは「이」であり、それに次ぐのが「음」であるが、これは用言性も持っている。そして名詞性が最も弱く、また用言性が最も強い接辞は「기」である。このように名詞化接辞といっても、接辞「이」は名詞の機能だけをするのに対して、接辞「음・기」は動詞と名詞の機能、つまり動名詞の働きをする構文上の違いが見られる。

日本語動詞の連用形名詞表現と最も近い韓国語の接辞は「이」である。というのは、日本語の連用形名詞と韓国語の接辞「이」はただ名詞の機能だけをする点で同じである。その他の韓国語の接辞「음・기」と日本語の連用形名詞とは機能の面で似ていたり、違っていたりもする。

## 2.1.3 日韓両語の構文的名詞化

日本語の連用形名詞が語彙的名詞化であることと、韓国語の動詞語幹につく接辞は語彙的名詞化で使われたり、構文的名詞化で使われたりすることは前で述べたとおりである。日韓両語の構文的名詞化に表れる形式を見てみよう。

日本語の構文的名詞化には連体修飾の形で補文が名詞化される。それらの形式は「こと・の」で表れる。韓国語の構文的名詞化には動詞語幹につく接辞と連体修飾の形で補文が名詞化される。それらの形式は接辞「음・기」と「것」で表される。

- (48)a 彼がお金を使ったことはすぐ明らかになった。  
 b 그가 돈을 썼음은 곧 밝혀졌다.
- (49)a 私がこのお金を全部使うのはもったいない。  
 b 내가 이 돈을 전부 쓰기는 아깝다.
- (50)a 彼がお金を使ったことはすぐ明らかになった。  
 b 그가 돈을 쓴 것은 곧 밝혀졌다.

日本語の構文的名詞化の標識である「こと・の」に韓国語の構文的名詞化の標識「것」と接辞形式とが対応している。これら韓国語の「것」と接辞「음・기」との意味上の違いはあまり感じられない。ただ接辞形式のほうが文語的な感じがし、補文標識「것」が会話的であるほどの違いは感じられる。しかし韓国語の接辞「음・기」と「것」とは同じ範疇のものではない。「음・기」は形式名詞の前で連体修飾する(50b)の「n(ㄴ)」のように、用言の語幹につく語尾であるとも言える。つまり、接辞は語尾と同じ機能をするのである。

韓国語の接辞「음・기」は名詞化の表現と補文化の表現との両方で使われていて、形式上の重複が見られる。日本語の構文的名詞化の補文標識「こと・の」と韓国語の「음・이・것」と対応する。つまり、日本語の連用形名詞形式は名詞化表現に用いることができ、(48)~(50)のような補文化した構文に用いることはできない。例えば、日本語が次の文で非文であるけれども、韓国語の接辞「음・기」が構文的名詞化でも用いることができるからである。

- (51) a\* 彼がお金を**使い**はもったいない。  
 b 그가 돈을 **쓰키**는 아깝다.
- (52) a\* 彼がお金を**使った**はすぐ明らかになった。  
 b 그가 돈을 **썼음**은 곧 밝혀졌다.

#### 2. 1. 4 日韓両語の名詞化の意味

日本語の連用形名詞は元の動詞の意味とも関わっていないながら、「～すること、～するもの、～する人」などの意味を表す。いくつかの例を挙げてみよう。以下では「～すること」をAで、「～するもの」をBで、「～する人」をCで表記する。

- (53) A : 泳ぎ、読み書き、乗り降り、考え、教え、望み、金使い、売れ行き、滑り、貯え、終わり、受付、暮れ、夜明けなど、  
 B : 包み、揚げ、妨げ、支え、つまみ、差し入れ、下履き、手提げ、はかり、缶切り、爪切り、ネジ廻し、糸巻、一輪差し、洋服掛けなど  
 C : 見習い、付き添い、船乗り、雇いなど

上のような日本語の動詞の連用形名詞の意味に対して、韓国語の用言の語幹につく接辞「이・음・기」は各々がA B Cの意味を表す。いくつかずつ例を挙げてみる。

- (54) 이 :  
 A : 가을**걸이** (秋の取り入れ)、갈이 (耕すこと)、걸음**걸이** (足取り)、꽃**꽃이** (生け花)、구이 (焼くこと)、나들이 (外歩き)、꽃**놀이** (花見) 달**맞이** (月見)、더부살이 (住み込み)、씨**밭이** (種取り)、가슴**앓이** (胸焼け)、밭**이** (稼ぎ) など、  
 B : 끈**끈이** (とりもち)、다리**미** (アイロン)、더**듬이** (触覚)、땀**받이** (汗取り)、두루**마기** (韓国伝統衣装、外套)、미**닫이** (障子)、불**박이** (作り付け)、새간**불이** (所帶道具)、손**잡이** (取手) 올라**미** (罨)、재**떨이** (灰皿)、칸**막이** (衝立)、겨우살이 (宿り木)、먹**이** (餌、食べ物)、옷**걸이** (洋服掛け)、떡볶**이** (韓国の料理、餅炒め) など



C : 고기잡이 (漁夫)、구두닦이 (靴磨き)、떠벌이 (おしゃべり)  
떠돌이 (流れ者)、살붙이 (身内)、젓먹이 (乳飲み子)、한눈  
팔이 (よそ見ばかりする人) など

形容詞 : 길이 (長さ)、깊이 (深さ)、높이 (高さ)、넓이 (広さ)  
높낮이 (高低) など

(55) 음 :

A : 바람 (望み)、거스름 (お釣)、굶주림 (飢え)、기다림 (待つ  
こと)、가르침 (教え)、꾸짖음 (叱り)、걸음 (歩行)、먹음  
(食べること)、죽음 (死)、웃음 (笑い)、울음 (泣くこと)  
알림 (知らせ) など、

B : 그림 (絵)、튀김 (揚げ)、볶음 (炒め)、비빔 (混ぜ)、찜  
(蒸した物、韓国料理の一種)、통조림 (缶詰め)、책반침 (下  
敷き) など、

形容詞 : 정다움 (親密)、해롭음 (有害)、괴로움 (苦しさ)、고마  
움 (ありがたさ)、놀라움 (呆れること)、노여움 (怒り)、기  
쁨 (嬉しさ)、미움 (憎しみ)、무서움 (恐ろしさ)、부끄럼  
(恥ずかしさ)、서리움 (悔しさ)、슬픔 (悲しさ)、즐거움  
(愉快)、게으름 (怠惰) など

(56) 기 :

A : 더하기 (足し算)、빼기 (引き算)、곱하기 (掛け算)、나누기  
(割算)、글짓기 (作文)、기울기 (傾斜)、달리기 (走り)、  
던지기 (投げ)、뽑기 (選り)、말타기 (乗馬)、줄다리기 (綱  
引き)、줄넘기 (縄跳び)、보기 (例)、살빼기 (ダイエット)  
부치기 (送付、送ること)、귀후비기 (耳をくじること) など、

B : 손톱깎이 (爪切り)、쓰레받기 (ちりとり)、해바라기 (向日葵)

C : 사팔뜨기 (斜眼)、소매치기 (すり)、새침떼기 (かまとと)、  
풋나기 (素人) など、

形容詞 : 가늘기 (細さ)、크기 (大きさ)、세기 (強さ) など

日本語の動詞の連用形名詞がA B Cの意味を表すのに対して、韓国語の接辞は「이」がA B Cの意味を、「음」がA Bだけの意味を、「기」がA B Cの意味を表す。そして前に述べたように、韓国語の接辞は形容詞にも付きまうことが上の例をみると明らかである。

韓国語の接辞「음」だけが「～する人」の意味を表さないということは「음」が状態を表す形容詞に一番多くつくことと係わりがあるように思われる。

韓国語の接辞三形式ともにA B Cの意味を表すことは、韓国語の接辞が構文的・意味的な対立に基づくためであろう。日本語の連用形名詞にも意味的な違いはあるにもかかわらず、連用形名詞表現形式が一つであるがために、表面上には表

れない。例えば、日本語の連用形名詞表現の中の「考え、祈り、教え」などは動作の内容を表すのに対して、「船乗り、見習い、附添い」などは動作の主体である人を表す。このように、日本語動詞の連用形名詞表現の中にも明らかに意味上の対立がある。

これまででは、日本語の連用形名詞に対して、韓国語の接辞が対応されることを見てきた。

次に韓国語の接辞間の意味について見てみよう。

まず第一に、接辞「이」は動作性を表す動詞について、その動作性に個別的抽象的な行為の意味を与える。一般的に動作性動詞の語幹につく場合は抽象名詞になるが、その動詞の前後に名詞がついて複合名詞になる場合は具体的な名詞になって、その動作性からなるもの、またその動作をする人の意味になる。

- (57) 놀이 (遊び)、몰이 (追い立て)、벌이 (稼ぎ)、구이 (焼き)、꽃이 (差し)、막이 (防ぎ)、잡이 (取り)
- (58) 꽃놀이 (花見)、물이꾼 (勢子)、밥벌이 (口過ぎ)、꽃꽂이 (生け花) 칸막이 (衝立)、보막이 (堰止め)、액막이 (厄除け)、

そして、二番目に接辞「이」は動作動詞だけにつくのではなく、状態を表す形容詞にもつくことができる。この用法は日本語では体言化接辞「さ」で表される。

- (59) 높이 (高さ)、깊이 (深さ)、넓이 (広さ)、길이 (長さ)、

三番目に接辞「이」は他の接辞「음・기」と違って、接辞「음」の後につくことがある。そして「음」の表す意味に更に具体的な意味を付け加える。

- (60) a 다리다 (アイロン掛けをする) ⇨ 다림 (アイロン掛けすること) ⇨ 다림이 (アイロン) ⇨ 다리미 (다림이から音韻変化された形)
- b 꾸리다 (荷造りをする) ⇨ 꾸림 (荷造りすること) ⇨ 꾸림이 (荷造りするもの、包み) ⇨ 꾸러미 (꾸림이から音韻変化された形)
- c 지지다 (煮詰める) ⇨ 지짐 (煮詰めること) ⇨ 지짐이 (煮詰めたもの 韓国の料理) ⇨ 지지미 (지짐이から音韻変化された形)。

四番目に接辞「이」は他の接辞「음・기」より転成化の度合いが強いことは上で見てきた。転成化の度合いが強いだけに、「음・기」に比べて、「이」がつく動詞にはかなりの制限がある。そして動詞の語幹が母音で終わっている動詞には接辞「이」がつくことができない。この例はかなりの多いのでいくつかの例を表でまとめると次のようである。

動詞語幹 + 語尾	日本語訳	i形名詞	um形名詞	ki形名詞
가꾸+다(kakku-da)	育てる	*가꾸이	가꿈	가꾸기
거르+다(koru-da)	飛ばす	*거르이	거름	거르기
건드리+다(konduri-da)	触る	*건드리이	건드림	건드리기
끼치+다(kkichi-da)	掛ける	*끼치이	끼침	끼치기
나르+다(naru-da)	運ぶ	*나르이	나름	나르기
느끼+다(nukki-da)	感じる	*느끼이	느낌	느끼기
만나+다(manna-da)	会う	*만나이	만남	만나기
뜨+다(ttu-da)	飛ぶ	*뜨이	뜸	뜨기

\*のついているものは、「이」が付かないもの

上の表で分かるように、韓国語の接辞「음・기」は「이」より自由に動詞につくことができる。

第二に、まず韓国語の接辞「음・기」について見てみよう。接辞「음」は動作・状態を表す用言に個別的な抽象の概念を与える。そして体言化接辞「이」よりも意味範囲が広い。というのは上の表の体言化接辞「이」がつかない動詞にもつきうるところからもわかる。また接辞「기」よりは現実性が強い。例えば、

- (61) a あそこで喧嘩(戦い)が起きました。  
 b 저기서 싸움이 벌어졌어요.  
 c\* 저기서 싸우기가 벌어졌어요.
- (62) a 花子は太郎が勉強するのを見ている。  
 b 영이는 철수가 공부함을 본다.  
 c\* 영이는 철수가 공부하기를 본다.

(63) a 太郎は花子がきれいであることを願っている。

b? 철수는 영이가 예뻐을 원한다。

c 철수는 영이가 예쁘기를 원한다。

(61)は喧嘩を見てきた人が言う場合に、(61b)が正しくて、(61c)は非文になる。というのは、(61b)は喧嘩のその現場性を表すのに対して、(61c)はその喧嘩の一般化された概念を表すためであると考えられる。同様に(62b)だけが文法的である。これは今太郎が勉強している場面を見るという意味である。(62c)は特定の現実の場面と言うよりは、一般化された認識の過程を表すようである。このように、体言化接辞「음」が現場性を帯びるので、この体言化接辞「음」は人を表さないのとも関係するようである。人を表さない代わりに、状態を表す形容詞(55)には一番多く表れる。

(63)のような期待を表す動詞とは現実形の強い「음」よりも、まだ現実化されていない行動や状態を現実化することを願うからであろう。

次に接辞「음」は接辞「기」と重なって名詞化をなすことがある。

(64) 꿈꾸기 (夢を見ること)、그림그리기 (絵(描き)を描くこと)、뛰뛰기 (高飛び、幅跳び)、숨쉬기 (息をつくこと)、잠자기 (寝を寝ること)、춤추기 (踊りを踊ること)、

(64)も同じ語源の用言が二回使われた用法であるけれども、これにも名詞性の強い「음」の次に動詞性の強い「기」が来ている。

(65) a 그가 의원으로 뽑힘(뽑혔음)을 누구나가 다 기뻐했다。

b 彼が議員に選ばれる(選ばれた)ことを誰もが喜んだ。

(66) a 남에게 무엇이든지 맡김은 안 좋은 것이다。

b 人になんでも任せるのはよくない。

(67) a 사장이 회사에 도착하심(하셨음)을 확인했다。

b 社長が会社にお着きになる(お着きになった)ことを確認した。

(68) a 오늘 공부가 잘 됨(되었음)을 기뻐한다。

b 今日の勉強がよくできたことを喜ぶ。

(69) a 내일 하심이 어떻습니까。

- b 明日なさることはどうですか。  
 (70)a 선생님이 아이에게 우유를 **꼭이셨슴을** 자랑했다.  
 b 先生が子供にミルクを飲ませられたことを自慢した。

(65)～(70)では韓国語の接辞「음」と使役形式、受け身形式、敬語形式、時制形式などと自由に結びつく例である。そして接辞「음」よりも動詞性の強い「기」もこれらの「음」の位置にこられることは当然である。韓国語の使役形式、受け身形式、敬語形式、時制形式などと体言化接辞との間には選択的に選ばれる。

- (71)a 아버님께서 **꼭이셨었겠기에** 특별히 부탁을 안 했어요.  
 b お父さんが多分飲ませられたらうから、特に頼んでおきませんでした。

それに対して(65)～(70)の日本語は連体修飾形式で構文的名詞化を表す。つまり韓国語も構文的名詞化であるけれども、どれも接辞がついて形式が表れる。

- (72)a 一步一步進める。  
 b 한 걸음 두 걸음 옮기다.  
 c\* 한 걸기 두 걸기 옮기다.  
 (73)a 歩き試合をする。  
 b 걷기 시합을 하다.  
 c? 걸음 시합을 하다.  
 (74)a 手の動きが素早い。  
 b 손놀리기가 재빠르다.  
 c 손놀림이 재빠르다.  
 (75)a 手の動きが見える。  
 b\* 손놀리기가 보인다.  
 c 손놀림이 보인다。

韓国語の体言化接辞「음」と「기」が動作の概念を表すという点では同じである。しかし、(72)のように、一步一步のような動作の個別的具体的な概念を表すときは、接辞「음」が使われるのに対して、接辞「기」が非文になるのは、一般的抽象的な概念であるからである。そして(75)「見える」のような視覚動詞には

具体的な概念がくるのに対して、抽象的な概念は非文になる。これらの例をもう少し見ると、

- (76) 그림 (絵)、더함 (足すこと)、도움 (助けること)、  
 (77) 그리기 (描くこと)、더하기 (足し算)、돕기 (助けること)、

(76)が動作の概念化とともに具体的なものになりうるのに対して、(77)は動作に対する一般化された抽象的な概念を表すようである。

## 2.2 形容詞の名詞化表現が表す意味・用法

日本語の形容詞を名詞化する場合、接辞「-さ・-み」を用いるのに対して、韓国語は動詞の名詞化形式と全く同様の形式を用いる。例えば、

- (78)a 彼の強さを実感した。  
 b 그의 강함을 실감했다。  
 (79)a 先生の有難みが分かった。  
 b 선생님의 고마움을 알았다  
 (80)a 彼は嬉しさを隠しきれなかった。  
 b 그녀는 기쁨을 감추지 못 해 했다。  
 (81)a 痛みを覚える。  
 b 아픔을 느끼다。

日本語の形容詞の接辞「さ・み」に韓国語の接辞は「음」で対応している。このように日本語の「さ」は殆どの形容詞に付きうる。韓国語の接辞の中で形容詞に最も付きやすいのがこの「음」である。

日本語の接辞「さ」は形容詞の語幹について、状態的な形容詞を程度概念の名詞にする。上の(78b)~(81b)の接辞「음」がつくと文法的な文になるが、接辞「기」が付くと非文か別の意味になる。

- (78) b 〱 그의 **강화기**를 실감했다.  
 (79) b 〱 \*선생님의 **교활기**를 실감했다.  
 (80) b 〱 \*그이는 **기쁜기**를 감추지 못 해 했다.  
 (81) b 〱 \***아프기**를 느끼다.

このように、接辞「음」は感覚を表す主観的な語には付きにくい。それに対し客観的な語には体言化接辞「기」が付きやすい。

- (82) a これの**大きさ**はどれくらいですか。  
 b 이것의 **크기**는 어느 정도입니까?  
 (83) a あまりにも**きれい**さにびっくりした。  
 b 너무나도 **이쁘기**에 깜짝 놀랐다.

形容詞を主観か客観による区別も一つの方法であるが、これが決め手にはならない。韓国語の「음」と「기」を構文上の違いについて、動詞の名詞化表現で一つの決め手と考えた。ここでもそれによると、

- (84) a ものすごい**痛さ**にびっくりした。  
 b 대단한 **아픔**에 깜짝 놀랐다。  
 (85) a\* ものすごく**痛さ**にびっくりした。  
 b\* 대단히 **아픔**에 깜짝 놀랐다。  
 (86) a\* ものすごい**痛い**ことにびっくりした。  
 b\* 대단한 **아프기**에 깜짝 놀랐다。  
 (87) a ものすごく**痛い**ことにびっくりした。  
 b 대단히 **아프기**에 깜짝 놀랐다。

(84)は名詞「痛さ」を形容詞「ものすごい」が連体修飾をしている。つまり、この「痛さ(아픔)」は接辞「さ・음」が名詞を表すから文法的な文になっている。これの逆である(85)の「痛さ(아픔)」を副詞「ものすごく」が連用修飾しているから非文になっている。そして(87a)は用言「痛い」を副詞「ものすごく」が連用修飾しているので文法的な文である。これと同じことが言えるとする、(87a)と同一形式である(87b)の「아프기」が用言だから文法的な文ということに

なる。

形容詞の名詞化でも動詞の名詞化と同じく、韓国語の接辞「이・음・기」の名詞性の度合いが構文形式をかなり支配している。これに対して日本語の接辞「さ・み」は名詞化をする機能は持っているも、補文化する機能は持っていないことである。

韓国語は「이」名詞性を一番強く持っていて、その次に「음」であり、一番名詞性の弱い接辞は「기」である。

そして韓国語の接辞「음・기」の意味についてみると、

- (88) a この花は美~~し~~さが一番だ。  
 b 이 꽃은 아~~름~~다~~움~~이 제일이다.  
 c 이 꽃은 아~~름~~답~~기~~가 제일이다.  
 (89) a この木は実の美~~し~~さが一番だ。  
 b 이 나무는 열매의 아~~름~~다~~움~~이 제일이다.  
 c 이 나무는 열매의 아~~름~~답~~기~~가 제일이다.

(88)は日本語の「美しさ」に韓国語の(88b)と(88c)が対立している。(88b)が表す意味は、花のいいところ、花の香ばしさとか、花が薬用に使われると薬用性などの点で美しさが一番である。それに(88c)が表す意味は、花のきれいさの程度で他の花よりもこの花が一番きれいである。

(89)も日本語の「美しさ」に韓国語(89b)と(89c)が対立している。(89b)が表す意味は木の良さのなかで、他でもなく、実の美しさが一番である。それに(89c)の意は、実の美しさに関して言えば、この木が一番である。

(88)(89)のように「이」と「기」には微妙な違いがある。これらの名詞を挙げると

- (90) 깊음(深さ)、고움(きれいさ)、무거움(重さ)、더움(暑さ)、기쁘(嬉しさ)、슬픔(悲しさ)、서러움(悔しさ)、노여움(怒り)、  
 (91) 깊기(深さの程度)、곱기(美しさの程度)、무겁기(重さの程度)  
 덥기(暑さの程度)、기쁘기(嬉しさの程度)、슬프기(悲しさの程度)  
 서럽기(悔しさの程度)、노엽기(怒りの程度)、



形容詞の反対語を対として持っている場合には付かない場合がある。それに韓国語の体言化接辞「이」もつかないことがある。

- (92) a 富士山の高さはいくらですか。  
 b 富士山 높이는 얼마입니까?  
 (93) a\* 富士山の低さはいくらですか。  
 b\* 富士山 낮이는 얼마입니까?

これのように、標高のようなプラス方面の程度のみを問題にするときは、反対語で置き換えることはできない。

- (94) a あの山の高さはいくらありますか。  
 b 저 산의 높이는 얼마입니까?  
 (95) a\* あの山の小高さはいくらですか。  
 b\* 저 산의 약간의 높이는 얼마입니까?

のように、絶対的な程度を表す語には付かない。

- (96) a 急だ(\*急さ)、純だ(\*純さ)、変だ(\*変さ)、妙だ(\*妙さ)、

のような字音語には付かない。

そして日本語の体言化接辞「み」も、形容詞の語幹について名詞化するけれども、かなりの制限がある。まず「み」が付くものは、

- (97) 赤み、明るみ、暖かみ、厚み、甘み、ありがたみ、哀れみ、痛み、うまみ、重み、おもしろみ、辛み、悲しみ、臭み、苦しみ、渋み、楽しみ、強み、苦み、憎しみ、深み、丸み、柔らかみ、弱み、など

「痛む／痛み」のように、動詞の連用形名詞と共通するものもある。

- (98) 痛み、悲しみ、苦しみ、楽しみ、など、

体言化接辞「み」は体言化接辞「さ」と比べて、例が少ない。特に「長さ、大きさ、小ささ、広さ、多さ、太さ、若さ」のような客観的な形容詞に付く例がほとんどない。「厚み、重み、深み、丸み」のような客観的な形容詞に付いた例も、「さ」のような程度概念よりは対象が持つその特徴を感覚的・精神的にとらえている。

### 3. 終わり

以上、日韓両語の用言の名詞化に関して、形式、意味・用法などを対照的に概述を試みた。日韓両語が、文法構造・概念において、基本的には同じであるものの、細部を見ればかなりの相違点を持っているということの一端を明らかにできたと思う。

しかしながら、本稿の記述は問題の中核となる点は扱っているけれども、あくまでも概述に過ぎず、問題点のすべてを尽くしたものでは勿論ない。今後の課題としては、対照言語学的見地から、この課題に関してさらに詳細な検討を加えるとともに、問題の性質上、名詞化という狭い領域に考察を限定せずに、補文構造までも含めた広い観点から、この問題を捉えることに努めたい。

#### 【参考文献】

- (1) 西尾寅弥、『現代語彙の研究』、明治書院、昭和63.
- (2) 金永錫・李相億、『現代形態論』、學研社（ソウル）、1992.
- (3) 崔鉉倍、『우리말본(urimalbon)』、正音社（ソウル）、1982.
- (4) 沈在箕、『國語語彙論』、集文堂（ソウル）、1987.
- (5) 洪宗善、『國語體言構文의 研究』、高大民族文化研究所（ソウル）、1990.